

## <BIZ スタイル 仕事の流儀>

甲府でのお客は予約で受けている。シマダが不在になることも大きな理由ではあるが、じっくりその人と向き合っているうちにできたスタイル。その人の仕事や生活を念頭に“次はこれ”と提案。肌がパッとピンクに輝く品をともし探す。故に時間がかかり効率が悪い。しかし、お客様にはとても喜ばれる。お客様が喜ぶのを見るとシマダもホット安心、喜びも湧く。

“日本橋高島屋コンシェルジュの最高のおもてなし”というお話を聞く機会があった。そこまではするの？と思う程の配慮。それは、その時には何でもない事で終わっても、やがて大きな利益になって返ってくるという。そこに利益だけを追求せず社会貢献もするという創業者の理念を知り、商売の考え方等多くの高島屋の社員に教えられた感謝の由縁を知るに至った。シマダはデザインから制作、そして販売までもと多岐に亘り細やかに心を傾けている。省ける事があるならそうしたい。しかし、美しく心を打つ魅力がなければ意味がない。お客様に喜んでもらえてこそなのだから。



## <伊勢再訪>

昨年暮れの伊勢訪問。樹々も空気も全てが澄み渡り美しい所にまた身を置きたい、と再訪。時期は夏。黒ブラウスにスラックス、黒旅行靴のいでたちを正殿の宮司は上から下へじろりと眺め“この暑き折にても遠方からのお見えの方も黒上下服の正装にておみえになります”とたしなめられた。伊勢からはレンタカーで金剛證寺を経て鳥羽に入り、ここからはリゾート気分。オーシャンビューの広い部屋でくつろぎ、真珠の色々も勉強、体験。水族館の魚さんたちに癒された旅でした。



山の中の  
朝熊岳金剛證寺



真珠貝から真珠取り出し体験  
ついていたヒモを食べさせて  
くれる (志摩)



美しい色配合のナンヨウハギに  
しばし見とれる (鳥羽水族館)

## <英国オックスフォードで学ぶということ>

何年かたつと再読したくなる本のひとつ。シンボジュームの元の意味はワインを飲みながら語らうというギリシャ語とのこと。その通りにワイン片手に美術、絵画、音楽史を語るのにも先生も生徒も大量の下調べの後の真剣問答。こうして学生は鍛えられ考える力を養う。決して how to は教えない。それも裏通りの古い建物のガタガタ階段の上の小部屋。また時には、ガウン着用の正装での講義。その後食堂に移動。キャンドルのもと数種のワインとランチが供される。様々なスタイルの講義がある中、ここ OX-BRIDGE（オックスフォードとケンブリッジの略称）では、詩学、神学、哲学などすぐに役に立たない学問程威張っていると書く。それらを経て学問の入口に立ち、選んだ学問についても語れるようになる。つまりそれらは全ての学問の基本とみなされる。絵を描く日本女性のたまたまの経験は、すぐ役に立つ事を教えてもらうことが当たり前。今日の日本の事情が悲しい位うすぺらな文化を生み出しているという状況を想起させる。読んでいっただけで高邁な環境を体験したかのような楽しさが再読の由縁か。



## <積読～ツンドク>

買ったものの積んでおくだけの読書。シマダも例外ではない。特に美術展の分厚い目録。詳細な記録があるだけに魅力が増す。大半が相当な重量なので帰宅後ネットで買うことになる。安心してそれらはツンドクゾーンに重なる。それでもパラパラ見て楽しい。読書の楽しさは世界史を散歩しているかのように大きなワンダーランドに入り込み時を忘れること。美味しい食事と楽しい読書ができなくなったらシマダの生は終わるとさえ思う。

## <大人のエレガントカジュアル>



三つ編みアコヤ真珠の下に  
アクアマリンが美しい  
知的でモダンなネックレス



ブルーオパールの斜めに  
ロードクロサイトがのる  
大人の上品カジュアル